5　次の文章は、平治の乱での源義朝敗北を受け、その妻が三人の幼子を連れて、大和の国に落ち行く途上の場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。 〈金沢大〉　二〇一四年度出題

　たそかれ時も過ぎぬれば、行きかふ人も跡絶えて、所々に見えし家も戸ぼそを閉ぢて心ぼそし。里のけぶりも絶えぬれば、宿借らばやのあらましだにも今はなし。夜も更けゆけば風荒く雪降りて、子どもも我が身も明日を待つべき命ともおぼえず。「あはれ、人しなも見知らざらむ山里人の草のもがな。こよひばかり身をも隠して、子どもを助けむ」と思ひゐたる。幼き者どもも泣きよわりて、声も時々は絶え、息も絶え入るやうに聞こゆれば、「かくても助からばこそあらめ、とてもながらふまじき身なれば、人里に宿を借りてこそ、もしや、たのみもあらむずれ」と思ひなして、たく火のかげの見えけるをたのみて、おづおづ近づきて竹の編み戸をうちたたく。とおぼしくて、おとなしき女、戸を開けてぞでたりける。常葉を見て、Ａよにあやしげにうちまもり、「いかにや、かひがひしき人をも召し具さで、幼き人々を具しまゐらせて、この雪にいづくへとておはしますぞ」と申せば、常葉、「さればこそ。夫のうき心を見せしかば、うらめしさのあまりに、子ども引き具して出でたれども、雪さへ降りて道をふみたがへてよ」とて、しほしほとしたる気色にて、Ｂ心ばかりは、まぎらかさむと、思はぬよしをすれども、涙はにあまりけり。主人、「さればこそ。あやしかりつるが、いかさまにも、ただ人にてはおはしまさじ。かかる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。行方も知らぬ君の御ゆゑに、老い衰へたるが六波羅へ召し出だされて、縄をもつき恥をも見て、命を失ふほどの目にあふとても、追ひ出だしたてまつるべきかは。この里のならひ、たれか請け取りまゐらせむ。野山にこそおはしまさむずらめ。これほど寒くたへがたきに、Ｃ明日までもいかでかながらへさせふべき。家こそおほけれ、こそあまたあれ、思し召し寄る御ことも、この世ならぬＤ御ちぎりにてぞさぶらふらむ。見苦しけれども入らせ給へ」とて、いそぎ呼び入れ、新しき取り出だしてしかせ、たき火してあて、応してぞすすめける。常葉は、胸ふさがりてすこしも見ず。子どもをばとかくすかして食はせけり。常葉がもの食はぬを、主人、心苦しく思ひ、いろいろのくだもの取り出だして、「これはいかに、あれはや」とすすむれば、ただことともおぼえず、ひとへに清水の観音の御あはれみなりと、行く末もたのもしくぞ思ひける。

（『平治物語』による）

（注）○人しな―─人の身分、地位。

○六波羅─―源義朝の敵方平清盛の本拠地。

○くだもの―─木や草の実をはじめとする種々の食べ物。

問１　傍線部Ａ「よにあやしげにうちまもり」について、なぜそのように見たのか。四十五字以内の現代語で答えよ。

問２　傍線部Ｂ「心ばかりは、まぎらかさむと、思はぬよしをすれども」について、このように振る舞った常葉の意図を簡潔に説明せよ。

問３　傍線部Ｃ「明日までもいかでかながらへさせ給ふべき」を、現代語訳せよ。

◎問４　この家の女主人は事態をどのようにとらえ、常葉の一行をどのように扱うことにしたのか。傍線部Ｄ「御ちぎり」を手がかりにして、六十字以内の現代語で答えよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ身分の高そうな女性が、Ｂ供人もなく幼児たちのみを連れて、Ｃこの雪の夜更けに山里にいるから。（43字）

Ａ＝２〔主語がなければ減点２。「高貴そうな」も可。「常葉が」は１点。〕

Ｂ＝２〔「頼りになる女房」「お世話をしてくれる人」も可。〕

Ｃ＝６〔「雪」「夜更け」「山里」及び文末の「から」がなければ各々減点２。〕

問２　Ａ夫の浮気に腹を立てて家を出てきたふりをすることで、Ｂ義朝の妻子という身分が明かされて Ｃ六波羅に捕まるのを避ける意図。

　［別解］義朝の妻子という身分が露見して六波羅に捕まるのを避ける意図と、作り話をして一時でも自分の境遇を忘れようとする意図。

Ａ＝３〔「つらい仕打ち」も可。〕

Ｂ＝３〔「露見して」も可。〕

Ｃ＝４〔「敵方」も可。文末の不備は減点２。ただし「こと」は可。〕

問３　Ａあなたたちは、Ｂ明日までどうして生きながらえなさることができようか、いやできるはずがない。

Ａ＝３〔主語のないものは減点３。「あなた」も可。〕

Ｂ＝７〔「明日まで」のないものは減点２。「ながらえさせる」は不可。「できる」はなくても「はずだ」「だろう」があれば可。反語でないものは減点３。〕

問４　Ａ常葉が源氏の妻だと見抜いたうえで、Ｂ他の家ではなく我が家に来たのもＣ前世からの因縁と考え、Ｄ温かくもてなすことにした。（56字）

Ｄがなければ全体０。

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの構文が正しくなければ全体０。

Ａ＝４〔「源義朝の妻」も可。〕

Ｂ＝２

Ｃ＝２〔「前世からの約束」「宿縁」も可。〕

Ｄ＝２

【現代語訳】

　黄昏時も過ぎてしまったので、（往来を）行き通う人もいなくなって、所々に見えた家も扉を閉じて（いるので）心細い。里の（生活を営んでいる証の）煙も消えてしまったので、宿を借りたいとの心当てさえも今はない。夜も更けていくと風は荒々しく雪が降って、子供たちも自分自身も明日まで生き延びることのできる命とも思われない。「ああ、私の身分（素性）も見知らないような山里に住む人の草庵があってほしい。今夜だけは（どこかに宿を借りて）身を隠して、子供を助けよう」と思って座っていた。幼い子たちも泣き疲れて、声も時々は聞こえず、息も絶えてしまうように思われるので、「このように（道端で親子が身を寄せ合って）しても助かるならば助かりたいけれど、とても生きながらえることができそうにない身であるので、人里で宿を借りると、もしかしたら、助けてくれる人もいるかもしれない」と思うようになって、焚く火の明かりが見えたのを頼りにして、おずおずと近づいて竹で編んで作った（粗末な）戸をたたく。主人と思われて、年配である女が、戸を開けて出てきた。常葉を見て、いかにも不審そうにじっと見つめ、「どうしたのか、しっかりとお世話をしてくれる供人もお連れにならないで、幼い子供たちをお連れ申し上げて、この雪の夜にどこへいらっしゃいますのか」と申し上げると、常葉は、「それでございます。夫がつらい心（浮気心）を見せたので、恨めしさのあまりに、子供を連れて（家を）出たけれども、雪までも降ってきて道を踏み間違えてしまいました」と言って、しょんぼりとした様子で、本当の心の中だけは、（相手に知られないように）ごまかそうと、（深くは）思っていないというそぶりをするが、涙は袖に余るほど流れて出てきた。主人は、「何か訳があるのであろう。不審に思ったが、きっと、並の身分の方ではいらっしゃいますまい。このような乱れた世の中であるので、しかるべき（立派な）方の奥方でいらっしゃるのであろう。先のこともわからないあなたのために、（私のような）老い衰えた身分の低い人間が（敵方である平清盛の本拠地である）六波羅に召し出されて、縄にかけられ恥をかかされ、命を失うほどの目に遭うとしても、（あなた様をこのまま）追い出し申し上げるでしょうか、いや追い出しなどいたしません。この（都に近く、利にさとい）里のならわしで、（私のほかに）誰が（あなたがたを）引き受け申し上げるでしょうか、いや誰も引き受けません。（今私が追い出したならば、あなた方は）野山にいらっしゃることになるだろう。（野宿することになれば）これほど寒くて耐えられないほどであるのに、

問３（あなたたちは、）明日までどうして生きながらえなさることができようか、いやできるはずがない。（この里にも）家は多くあるのに、門も多くあるのに、（わざわざ我が家に）思いをお寄せになることも、現世ではない前世からのご縁でございますでしょう。（この我が家は）みすぼらしいけれどもお入り下さい」と言って、急いで（家の中に常葉たちを）呼び入れて、新しい筵を取り出して敷かせて、たき火をして暖をとらせ、食事をつくってもてなし（常葉たちに）勧めた。常葉は、（あまりのうれしさに）胸がいっぱいになって少しも見る（手をつける）ことができない。子供たちにあれやこれやと促して食べさせた。常葉が食事を取らないのを、主人は、心配に思って、様々な木や草の実をはじめとする種々の食べ物を取り出して、「これはどうか、あれは（どうか）」と勧めるので、（常葉は）普通のこととは思われず、ひたすらに清水寺の観音菩薩のお慈悲であると、これからのことにも望みを持って心強く思った。